

論說及報告

自記検潮機の井戸内に於ける水面の運動

工學士 金森鉢太郎君

緒論

普通の自記検潮機に在りては其検潮機の記録する所のものは其井戸内に於ける水面の運動なることは言を俟たず、井戸は導管に依りて外海と連絡するを以て外海々面の運動に伴なひ井戸内の水面も亦運動すること明かにして即ち井戸内の水面の運動は一種の強迫運動なり、從て導管内に於ける水流に對する抵抗其他の原因によりて海面の運動と井戸内水面の夫れとは全く同一ならず、然らば其間に如何なる差異あるやと云ふに此問題を完全に解決することは困難なりと雖も著者考究の結果を次に論述して江湖の是正を仰がんとす。

基本の方程式

先づ次の如く定む

u	海面の高さ	z	井戸内の水面の高さ	ν	導管内に於ける水の速度
V	井戸内に於ける同上	d	導管の直徑	l	同上の長さ
a	同上の横断面積	A	井戸の同上	f	導管内に於ける摩擦係数
g	重力				

海面が井戸内の水面より高き時は水は海の方より井戸内に流入すべし、此時次の關係あり

g

重力

右の内 $\frac{v^2}{2g}$ は速度水頭、 $\frac{v^2}{2g}$ は導管の入口に於ける損失水頭、 $\frac{l}{d} \frac{v^2}{2g}$ は導管内に於ける摩擦の爲めに起る損失水頭にして井戸内に於ける損失水頭を省略す

$\frac{v^2}{2g}$ は速度水頭、 $\frac{l}{d} \frac{v^2}{2g}$ は導管の入口に於ける損失水頭、 $f \frac{l}{d} \frac{v^2}{2g}$ は導管内に於ける摩擦の損失水頭にして井戸内に於ける損失水頭を省略す
 化すれば次の如くなる

然るに $\alpha v = A V$

故

今

と置けば(3)は次の如くなる

$$V = \frac{dz}{dt} = 2m V \sqrt{n - z}. \quad (5)$$

次に井戸内の水面が海面より高き時は水は井戸内より海方に流出すべし。此場合にも關係は全く前

と同一なるを以て次の如くなる

$$-\frac{dz}{dt} = 2m \sqrt{\frac{2\pi l}{T}} \sin \frac{2\pi t}{T} \quad (6)$$

(5) 式は z の増しつゝある場合にして(6)式は其減じつゝある場合なり、

海面の運動を正弦曲線と假定する時

海面の運動には潮汐、波浪に起因するもの等種々ありて其運動も亦甚だ複雑なりと雖も今其運動を週期性の振動と假定する時は z の曲線は次の如きシニユソイドにて表はすことを得べし。

$$z = H \sin \frac{2\pi t}{T} \quad (7)$$

右の内 H は平均海面の上下に於ける z の最大値即ち振幅にして T は其週期なり、

(7) 式を(5)式に入るゝ時は次の如し、

$$\frac{dz}{dt} = 2m \sqrt{\frac{2\pi l}{T}} \cos \frac{2\pi t}{T} \quad (8)$$

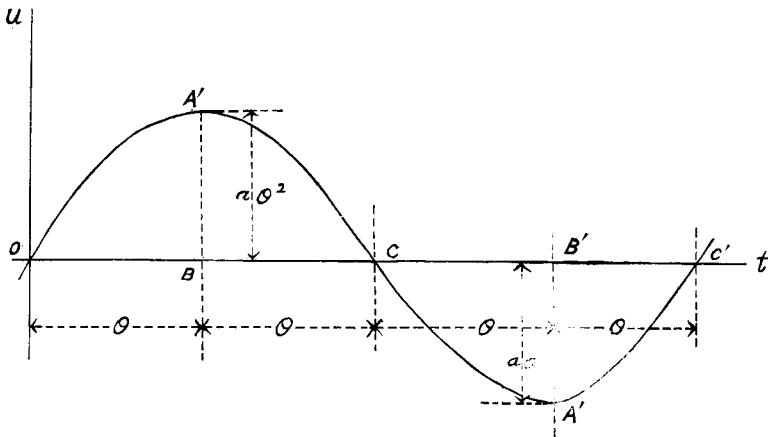
此微分方程式を解く時は z と $\frac{dz}{dt}$ との關係即ちこの曲線を得べきを以て井戸内の水面の運動は茲に明白となるべき理なり然れども此方程式を解くことは數學上困難なり、

バラボラと假定する時

次に de Saint-Germain 氏の着想に従ひ海面の運動をバラボラと假定すべし(Flamant-Hydraulique, Paris, 1909,p.491)

第一圖に於て $OBCB'$ は平均海面にして海面は OAC 及び $C'A'C'$ の如くに振動するものとし之れを各同じ形狀を有し反対の方向を有するバラボラと假定し次の如き關係あるものとす、

圖一 第



$$AB = A'B' = a\theta^2 = H$$

一般には A^B と A^B とは同じからして O^B と B^C とは亦異なるものと假定するも以下の理論は同一なりと雖も今簡便の爲めに以上の如く置く

OVC のバラボラに對しては O 點を座標の基點とす。然る時は其方程式は次の如し

$t=0; n=0,$

$$t = \theta; \quad u = \alpha\theta^2$$

$$t=2\theta; \ u=0,$$

次に

此式に於て

$0 < t < \theta$; $\frac{du}{dt} > 0$ 即ち u は昇りつゝあり

$\theta < t < 2\theta$; $\frac{du}{dt} < 0$ は u は降りつゝあり

論說及報告

今(9)にて代表する二二二を組合すに當り其關係に依り

二段に分つ

第一段 u が v より高き時
此時には水は海方より井戸内に流入す、故に(5)式を探る、(9)式を(5)式に

此微分方程式は解くことを得即ち之を解けば次の形狀の方程式となる

$$[\sqrt{u-z} + a(\theta-t)]a[\sqrt{u-z-\beta(\theta-t)}]^\beta = A_1 \dots \dots \dots \dots \quad (12)$$

右の内々及び β は常数にして A_1 は任意常数なり(12)が(11)の解なることの證明は(12)を微分すれば(11)となることに依りて明かなり(12)を微分すれば次の如し

$$[\sqrt{u-z} - \beta(\theta-t)]^\beta a [\sqrt{u-z} + a(\theta-t)]^{\alpha-1} \left[\frac{1}{2} \sqrt{u-z} d(u-z) - adt \right],$$

$$+ [\sqrt{u-z} + \alpha(\theta-t)] u \beta [\sqrt{u-z} - \beta(\theta-t)]^{\beta-1} \left[\frac{1}{2} \frac{1}{\sqrt{u-z}} d(u-z) + \beta dt \right] = C$$

而して

$$[\sqrt[n]{u-z} - \beta(\theta-t)]^\beta [\sqrt[n]{u-z} + \alpha(\theta-t)]^{\alpha-1} = \sqrt[n]{u-z} + \frac{\alpha}{\alpha+\beta} \frac{1}{\theta-t}$$

$$[\sqrt{u-z} + a(\theta-t)]^{\alpha} [\sqrt{u-z} - \beta(\theta-t)]^{\beta-1} = \sqrt{u-z} \frac{\Lambda_1}{\beta(\theta-t)}$$

なるを以て之を前式に入れ簡単にすれば次の如くなる

工學會

故に若し

$$\alpha\beta = -a; \quad \beta - a = m$$

ならば13)は11)に等しくなるを以て12)は11)の解なり。

從て此場合には

となる、即ち a は負数なり

第二段 ζ が n より高き時此場合には水は井戸内より海方に流出す故に(6)式を探る(6)式の微分方程式を解く時は前と同様に次の如くなる

$$[\sqrt{z-u} + \alpha'(\theta-t)]^\alpha [\sqrt{z-u} - \beta'(\theta-t)]^{\beta'} = A_2 \quad (15)$$

此場合には α' 及び β' は次の如し

$$\alpha'/\beta' = +\alpha; \quad \beta'-\alpha' = m$$

次に $C A' C'$ のバラボラに對しては C を基點とし其方程式を次の如くす

$$u = \alpha(\theta - t)^2 - \alpha\theta^2 \quad \dots \quad (17)$$

$$0 = n^t \cdot 0 = 1$$

$t=2\theta$; $n=0$

1

$$(2-a)avz = \frac{3P}{4}$$

自記検潮機の井戸内に於ける水面の運動

此式より

故に u は降りつゝあり

$\theta < t < 2\theta$; $\frac{du}{dt} < 0$ 即ち u は昇りつゝあり

此場合に於ても *w* と *z* の關係により一段に分づ

第三段 2 かよりも高き時

(6) 式の微分方程式を解く時は前と同様に次の如くなる

$$(\nabla_{z-u} + \alpha''(\theta-t)^\alpha) (\nabla_{z-u} - \beta''(\theta-t)) \beta'' = A_3 \quad (19)$$

$$\alpha''\beta'' = -\alpha; \quad \beta''-\alpha'' = m$$

此内 α'' 及び β'' は次の如し

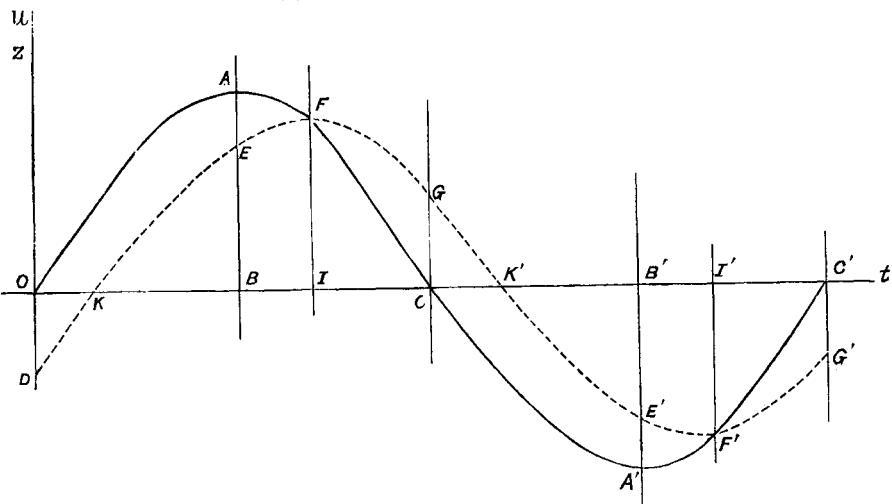
(5) 式の方程式を解く時は次の如し

$$[\sqrt{u-z} + \alpha'''(\theta-t)]\alpha''' [\sqrt{u-z} - \beta'''(\theta-t)]\beta''' = A_4 \quad (21)$$

此式中の a''' 及び β''' は次の如し

$$\alpha''' \beta''' = \alpha; \quad \beta''' - \alpha''' = m$$

以上の(12)、(15)、(19)及び(12)は z と t との関係を示すものにして即ち z の曲線を顯はすものなり、其内の任意常數 A_1 乃至 A_4 は $t=0$ なる時に於ける z の大さによりて決定せらるゝものとす。



第二圖に於て實線にて示したる $O A F C A' F' C'$ の曲線とし點線にて示したる $D K E F G K' E' F' G'$ を z の曲線とする時は後者の内 $D K E F$ の部分は第一段に於ける(12)の方程式の示す曲線にして $F G$ の部分は第二段に於ける(15)の方程式 $G K' E' F'$ の部分は第三段に於ける(19) $E' G'$ の部分は第四段に於ける(21)の示す曲線ならざるべからず從て次の關係を生すべし

$$(1) OD = -Z_0 \text{ かつ } t=0 \text{ の時には } u=0 \text{ なるが故に} (12) \text{ より}$$

$$(V\sqrt{Z_0} + a\theta)^{\alpha} (\sqrt{Z_0} - \beta\theta)^{\beta} = A_1, \quad (23)$$

$$(2) F B = Z_0 \text{ かつ } t=\theta \text{ の時 } u=a\theta^2 \text{ なるを以て} (12) \text{ より}$$

$$(a\theta^2 - Z_0^2)^{\frac{\alpha+\beta}{2}} = A_1$$

$$\therefore Z_0 = a\theta^2 - A_1^{\frac{2}{\alpha+\beta}}. \quad (24)$$

(3) A E は從て次の如し

$$\overline{AE} = A_1^{\frac{2}{\alpha+\beta}}. \quad (25)$$

(4) $OK = t_0$ かつ $t = t_0$ の時 $z = 0$ なるが故に(12)より

$$[V\sqrt{a\theta^2} - a(\theta-t_0)^2 + a(\theta-t_0)]^{\alpha} [V\sqrt{a\theta^2} - a(\theta-t_0)^2 - \beta(\theta-t_0)]^{\beta} = A_1. \quad (26)$$

(5) $OI = t_1$ より $t_1 = t_1$ の時 $u - z = 0$ なるを以て (12) より
 $[a(\theta - t_1)]^\alpha [-\beta(\theta - t_1)]^\beta = A_1$

$$\therefore t_1 = \theta - \left(\frac{A_1}{\alpha^2 (-\beta)^{\beta}} \right)^{\frac{1}{\alpha+2}} \quad (27)$$

又 (15) より

$$[a'(\theta - t_1)]^{\alpha'} [-\beta'(\theta - t_1)]^{\beta'} = A_2$$

$$\therefore t_1 = \theta - \left(\frac{A_2}{\alpha'^2 (-\beta')^{\beta'}} \right)^{\frac{1}{\alpha'+2}} \quad (28)$$

$$(6) BI = t_1 - \theta = - \left(\frac{A_1}{\alpha^2} \right)^{\frac{1}{\alpha+2}} (-\beta)^{\beta} = - \left(\frac{A_2}{\alpha'^2} \right)^{\frac{1}{\alpha'+2}} (-\beta')^{\beta'} \quad (29)$$

(7) $GIC = Z_{20}$ にて $\Sigma t = 2\theta$ の時 $n=0$ なるを以て (15) より

$$[\sqrt{Z_{20}} - a'\theta]^{\alpha'} [\sqrt{Z_{20}} + \beta'\theta]^{\beta'} = A_2 \quad (30)$$

又 (19) より $\theta(t=0)$

$$(\sqrt{Z_{20}} + a''\theta)^{\alpha''} (\sqrt{Z_{20}} - \beta''\theta)^{\beta''} = A_3 \quad (31)$$

(8) $B'E' = -Z_{10}$ にて $\Sigma t = 0$ より

$$Z'_0 = a\theta^2 - A_3 \frac{2}{\alpha'' + \beta''} \quad (32)$$

(9) E' A' は從て次の如し

$$\overline{Y'A'} = A_3 \frac{2}{\alpha'' + \beta''} \quad (33)$$

(10) $OE = t_0$ にて $\Sigma t = 0$ より

$$\left[\sqrt{a(\theta - t_0)^2 - a\theta^2 + a''} (\theta - t_0) \right]^{a''} \left[\sqrt{a(\theta - t_0)^2 - a\theta^2} - \beta''(\theta - t_0) \right]^{\beta''} = A_3 \quad (34)$$

$$(11) \quad C'V = t_1' \text{ より } \text{ (19) } \rightarrow \text{ (22)}$$

$$t_1' = \theta - \left(\frac{A_3}{a''a'' - \beta''\beta''} \right)^{\frac{1}{a'' + \beta''}} \quad (35)$$

$$\text{又 (22) } \rightarrow$$

$$t_1' = \theta - \left(\frac{A_4}{a'''a''(-\beta'''-\beta''')} \right)^{\frac{1}{a''' + \beta'''}} \quad (36)$$

$$(12) \quad B'V = t_1' - \theta = - \left(\frac{A_3}{a''a''(-\beta''\beta'')} \right)^{\frac{1}{a'' + \beta''}} = - \left(\frac{A_4}{a'''a''(-\beta'''-\beta''')} \right)^{\frac{1}{a''' + \beta'''}} \quad (37)$$

$$(13) \quad C'G' = -Z_0' \text{ より } \text{ (22) } \rightarrow$$

$$\left[\sqrt{Z_0'} - a''' \theta \right]^{a'''} \left[\sqrt{Z_0'} + \beta''' \theta \right]^{\beta'''} = A_4 \quad (38)$$

$$\text{又 (12) } \rightarrow$$

$$\left[\sqrt{Z_0'} + a\theta \right]^\alpha \left[\sqrt{Z_0'} - \beta\theta \right]^\beta = A_1 \quad (39)$$

$$\text{次に (14) 及び (20) (16) 及び (22) } \rightarrow$$

$$a = a''; \quad \beta = \beta''; \quad a' = a'''; \quad \beta' = \beta''' \quad (40)$$

又 D K E F G の O A F C に於ける關係は G K E F G の C A F C に於ける關係に同一なりを假定する時は次の關係を得

$$A_1 = A_3; \quad A_2 = A_4 \quad (41)$$

$$OD = GC = CG'; \quad Z_0 = Z_{20} = Z_0' \quad (42)$$

自記検潮機の井戸内に於ける水面の運動

四五六

EBC = B' r'; ZB = Z' 9; AEB = E' A' (43

..... $\tau_{\text{max}}^{\text{opt}}(t) = \text{L}_3$

OK = CK'; $t_0 = t'_m$, (45)

... 46

$$KK' = II' = 2\theta$$

以上の如く種々の關係あるを以て此内の若干を用ひ A_1 , A_2 等を決定することを得べしと雖も之を實際に適用するに當り誠に不都合なる結果を生ずるに至る、其次第を述べん

(一此由綱ねハラカラの内部即ち四面の側にのみ存在することを得
何となれば若し然らずして假りに外部にも存在すとせば此場合にこよなまひよりも大きなり遂て2)

は虚数となるべきを以てなり

(此曲線はバラボラと唯一點に於てのみ交錯することを得

之れは(27)及び(28)より明かなり

(三) の最大値は此曲線とパラボラとの交錯點に相當す

12 を微分すれば 11 となる 11 を零に等しくすれば 11 を得られれば交錯の條件なり

四) z の上りつゝある場合の曲線

此場合には $\omega = 2\pi\nu_{n-z}$ に於て兩側共正號ならざるべからず、即ち(12)は此假定に依り得たる方程式にして第二圖及び第三圖に於ける K E F の如き曲線なり此場合には其曲線とバラボラとの交錯點 F は A の右方にありて $OI = \ell$ はより大なり、極端の場合には F は A と一致し $\ell = 0$ 等しくなり從て A_1 は零となる。

圖三 第

(五) z の下りつゝある場合の曲線

は正負兩號を有するを以て若し其負號を取ればその下りつゝある場合にして本編の假定とは一致せざるも曲線は成立することを得此場合の曲線は第三圖に於けるF'E'K'の如きものにして前項の曲線とは屈曲の方向を全く反対にすO'I'はより小にしてF'はAの左方にあり極端の場合

其負號を取ればこの下りつ、ある場合にして本編の假定と得此場合の曲線は第三圖に於ける $F' E' K'$ の如きものにして、す。O' I' は θ より小にして F' は A の左方にあり、極端の場合にす。には F' は A と一致し從て A_1 は零となる。

(12) に於て A_1 の數値を異にするに従ひ一の曲線系を得べし、而して此系統中の曲線は何れも相互に交錯すること能はず。

(12)に於て A_1 が零なる時は α は負數なるを以て (12) は結局次の如くならざるべからず

これは前に述べたる如く第三圖に於けるAとFとが一致する場合にして即ち第四圖のADの曲線となる而して $\tau=0$ の

時は

にして此時 α と β との落差は最大にして時の進むに従ひ其落差は漸次に小となりA點即ち $\alpha = \beta$ に於て落差は零となる。⁴⁹⁾に據れば落差と時との關係は一のバラボラとなるを見る

(八) A_1 の他の數値の場合 (

(12) 中の A_1 が正號の數値なる時は (12) は第四圖に於ける $D'E'F$ の如き曲線となり $O'D'$ は (23) により AE は (25) により決定せらるべし而して AD 及び FED' は (6) により相交錯することなきが故に OD' は OD より大ならざるべからず又 A_1 は負數となることを得す

(九) β^2 は a よりも大なり

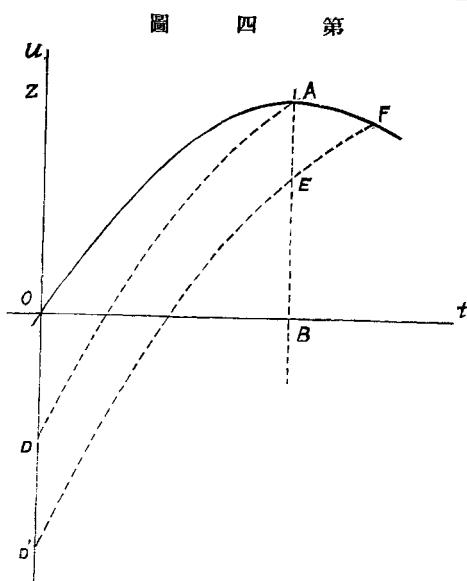
$$\beta^2 = \frac{1}{2}m^2 - a + \frac{1}{2}m\sqrt{m^2 - 4a}$$

而して $m^2 > 4a$

然らば β 及び β は虚數となるを以てなり

$$\frac{1}{2}m^2 > 2a, \frac{1}{2}m^2 - a > a \therefore \beta^2 > a$$

従て $\beta^{2a} > a\beta^2$ (51)



にして CG は BA より大なることなり、從て又 G 點は F 點より高く G' 點は F' 點より低くならざるべからず、是等は u との關係に於て實際上起り得べからざることに屬す、即ち此の如き不都合なる結果を生ずるを以て (12) 以下の方程式は實際上價値なきものと稱せざるべからず、又後章に説明する所あるが如く運動の最初の條件に關係する場合に於ても (12) 等の方程式は實際上

不都合なる結論を出すべし

此の如きが故に(12)等の方程式によりては未だ本問題を解決すること能はざるものなりと信ず、而して(12)等の方程式が此の如く不都合なる結果を生ずるは、曲線をバラボラと假定せるに源因す。

直線と假定する場合

以上の如く u 曲線をバラボラと假定する時は數學上便宜あるに拘はらず尙實際上問題を解決するに足らずとせば次に u 曲線をハイバーボラ若くは橢圓と假定する時は如何此場合に於ても亦數學上の困難あり

次に γ 曲線を直線と假定する時は(5)式を解くことを得べし
直線の方程式を次の如くす

$$n = \alpha t$$

一 塗の基點は直線上に在るものとす

之を(5)式に入るれば

之を解く時は次のものを得

然れども、曲線を直線と假定するは餘りに事實に遠ざかれるの缺點あり

2 曲線を假定す

以上に述べる所に依り本問題に就て完全なる解決法を見出すことが能はれんことを知る所にして次に一の便宜法を述べんとする。

$$t_0 \text{ の時の井戸水面の速度 } V_0 = 2m\sqrt{z_0 - u_0}$$

$$t_0 + \Delta t \text{ の時 同上 } V_1 = 2m\sqrt{z_1 - u_1}$$

とする時 Σ

$$\Delta t \text{ の間の平均速度 } \frac{V_0 + V_1}{2} = m(\sqrt{z_0 - u_0} + \sqrt{z_1 - u_1})$$

$$\frac{V_0 + V_1}{2} \times \Delta t = \Delta z = z_0 - z_1$$

同様に

$$\frac{V_1 + V_2}{2} \times \Delta t = z_1 - z_2$$

$$\frac{V_{n-1} + V_n}{2} \times \Delta t = z_{n-1} - z_n$$

今第1圖に於て $OI = t_0$ 且つ F から F' 點迄の間を考慮する時は V_n は F に於ける速度 V_n は F' に於ける速度にして共に零なり故に上式を合計する時は

$$(V_1 + V_2 + \dots + V_{n-1}) \times \Delta t = z_0 - z_n$$

而して

$$V_1 + V_2 + \dots + V_{n-1} = 2m(\sqrt{z_1 - u_1} + \sqrt{z_2 - u_2} + \dots + \sqrt{z_{n-1} - u_{n-1}})$$

又^ハ二^ニ三^ミなるに依り

$$= 2m \sum_{n=1}^{n-1} \sqrt{z_n - u_n}$$

u 及び z 兩曲線を假定する時は近似法により此式を解くことを得べし

今 u 曲線を次の如く假定す

但し此場合には第二圖に於けるB點を座標の基點とす、此式中HはABの高さにしてTはBB'を表す、

$$z = aH \cos \frac{2\pi(t-t_0)}{T} \quad \dots \quad (57)$$

此式中 H_a は第二圖の F-I の高さにしておれば B-I の時を示すものなり
F 點に於ては以上の(56)及び(57)の兩式を満足せざるべからざるを以て次の關係を得

$$dH = H \nu_{co} \frac{2\pi t_0}{T}$$

即ち a の數値は 0 より大にして 1 より小なるものとなる。 $\triangle\triangle$

H は u の振幅にして T は其週期なり \dot{H} は z の振幅にして T は其週期なり、自記検潮機の井戸内の水は自己振動を爲すことを得ずして其振動は全く外海より来る強迫振動のみなるを以て週期は兩者同じからさるべからず又 z の振幅は u の夫れより大となることを得ず、之れ即ち (58) の示す所のものなり、次にまほ位相の後れを示すものとす

(56) 及び (57) を (55) に入るゝ時は次の式を得

$$aH = m \sum_{t=0}^{t=t_0+T} \sqrt{aH_0 \cos \frac{2\pi(t-t_0)}{T}} - H_0 \cos \frac{2\pi t}{T} \times \Delta t \quad (59)$$

此式は直接に解くことを得ずと雖も近似法により aH 及び \dot{H} を見出すことを得

次に實例を擧げむ

内務省に於て宮城縣鹽竈港に設置したる自記検潮機の井戸は次の如き寸法を有せり
導管の長さ $l = 107$ 尺 (導管は鐵管なり)
同上の徑 $d = 0.5$ 尺

井戸の徑 $D = 2.5$ 尺

次に導管内に於ける摩擦係數を 0.02 と假定し (4) 式に入るれば

$$2m = \sqrt{\left(\frac{2.5 \times 2.5}{0.5 \times 0.5}\right)^2 \left(1.5 + 0.02 \times \frac{107}{0.5}\right)} = 0.134$$

$$\therefore m = 0.067$$

之れは一の井戸及び導管のシステムに就ては固有の數なり

今 u 曲線に於て $H = 6$ 尺; $T = 12$ 秒なる場合に於ける z の曲線を求めんとする

(58)(一) 先づ試みに $aH = 1.00$ 尺を假定す
より

$$\cos \frac{2\pi t_0}{T} = -\frac{1}{6} = 0.1667$$

$$\therefore \frac{2\pi t_0}{T} = 80^{\circ}35.'6 = 80.593$$

$$t_0 = \frac{80.593}{180} = 5.373 \text{ 秒}$$

工 学 會 誌 第 三 六 卷

(59) 中の t_0 を求むる爲めに次の表を作ら

t (秒)	$\frac{2\pi(t-t_0)}{T}$ (度)	z (尺)	u (尺)	$z-4$	$\sqrt{z-u}$
5.373	0.0	1.000	1.000	0.0	0.0
6	9.405	0.987	0.0	0.987	0.993
7	24.405	0.911	-1.554	2.465	1.570
8	39.405	0.772	-3.000	3.772	1.942
9	54.405	0.579	-4.242	4.821	2.196
10	69.405	0.348	-5.196	5.544	2.355
11	84.405	0.094	-5.796	5.890	2.427
12	99.405	-0.163	-6.000	5.837	2.416

地盤燃氣機の井戸内に於ける水面の運動

四八四

13	114.405	-0.413	-5.796	5.383	2.320
14	129.445	-0.634	-5.196	4.562	2.136
15	144.405	-0.815	-4.242	3.427	1.851
16	159.405	0.937	-3.000	2.063	1.436
17	174.445	-0.995	-1.554	0.559	0.748
17.373	180)	-1.000	-1.000	0.0	0.0

$$\therefore m \sum_{t=0}^{t=t_0+1} \sqrt{aH \cos \frac{2\pi(t-t_0)}{T} - H \cos \frac{2\pi t}{T}} \times \Delta t = 1.462$$

然るに $aH = 1.00$ なるを以て $\frac{2\pi(t-t_0)}{T}$ を満足せしむる能はず依りて更に次の假定を以て試む

(1) $aH = 1.5$ の時定数

$$\cos \frac{2\pi t_0}{T} = \frac{1.5}{6} = 0.25$$

$$\frac{2\pi t_0}{T} = 75.5 \quad \therefore t_0 = \frac{75.5}{15} = 5.03 \text{ 之れを } 5'' \text{ とする}$$

t (秒)	$\frac{2\pi(t-t_0)}{T}$ (度)	z (尺)	u (尺)	$z-u$	V_z-u
5	0	1.500	1.554	0.0	0.0
6	15	1.449	0.0	1.449	1.202
7	30	1.299	-1.554	2.853	1.689
8	45	1.061	-3.000	4.061	2.015
9	60	0.750	-4.242	4.992	2.234

10	75	0.389	-5.196	5.585	2.363
11	90	0.0	-5.796	5.796	2.407
12	105	-0.389	-6.000	5.611	2.369
13	120	-0.750	-5.796	5.046	2.246
14	135	-1.061	-5.196	4.135	2.033
15	150	-1.299	-4.242	2.943	1.716
16	165	-1.449	-3.000	1.551	1.245
17	180	-1.500	-1.554	0.0	0.0
計			21.519		

$$\therefore m \sum_{t=t_0}^{t=\omega+T} \sqrt{aH \cos \frac{2\pi(t-t_0)}{T} - H \cos \frac{2\pi t}{T}} \times \omega dt = 1.442$$

然るに $aH = 1.5$ なるを以て左方にてや (59) を満足せず假定_(一)にては (59) の右方は左方に比し過となり假定_(二)にては左方不足となるを以て眞の左の數値は兩者の中間に在るを知る依りて比例にて之を求むれば次の如く

$$0.462 + 0.058 : 0.5 = 0.058 : x$$

$$x = 0.056$$

$$\therefore aH の眞値 = 1.5 - 0.056 = 1.444$$

從て

$$a = \frac{1.444}{6} = 0.24$$

$t_0 = 5''\cdot07$

を得べし

月九年三正大

前例に依りて之を觀れば外海に於ける振幅六尺(高さ一二尺)周期一二秒の波此の如き波をシニユソイドと假定するの可否は暫措きが自記検潮機の井戸内に侵入する時は井戸内に於ては振幅は約四分の一に縮少せられ位相に於て約五秒の後れを生ずることを見る

此の如き結果を生ずる源因二個あり、一は導管内に於て水の流れに對する抵抗あるが爲めにして二は導管と井戸との寸法如何に關す⁽⁵⁹⁾於て $\alpha = 1$ なる場合には $m = 0$ となり ν の内のものは各零となり Σ も亦零となる故に $m = 8$ ならざるべからず⁽⁴⁾に據れば m の無極大なる爲めには A が無極小なるか又は a が無極大なるか何れかの場合なり、換言すれば井戸の徑が無限に小なるか又は導管の徑が無限に大なれば後者の場合には勿論導管内に於ける抵抗なし井戸内に於ける振動は外海の夫れと全く同大にして同時なり

次に $\alpha = 0$ なる場合には $t_0 = \frac{T}{2}$ にして $t > \frac{T}{2}$ 従て $\frac{2\pi t}{T} > \pi$ なるを以て

$$\sqrt{aH\cos\frac{2\pi(t-t_0)}{T} - H\cos\frac{2\pi t}{T}} = \sqrt{-H\cos\frac{2\pi t}{T}} = \sqrt{H\sin^2\left(\frac{2\pi t}{T} - \pi\right)} \quad (60)$$

之れは虛數にもあらず又零にもあらず故に此場合には $m = 0$ ならざるべからず⁽⁴⁾に據れば m が零となる爲めには A が無極大なるか ν が無極大なるか a が無極大なるか又は ν 従て ν が無極小なるか何れかならざるべからず、換言すれば井戸の面積が無限に大なる時導管の長さが無限に大なる時導管内に於ける抵抗が無限に大なる時若くは導管の徑が無限に小なる時(此場合には勿論導管内に於ける抵抗は無限に大なり)には井戸内に於ては外海の振動の如何に拘はらず少しも水面の變動な

きものとす。

以上兩個の極端の場合を除き其他の場合には井戸内の水面は外海々面の運動に伴ない必らず運動すべしと雖も其大きさは多少減縮せられ位相に於て後れを生ずるを免れず故に自記検潮機の記録は外海々面の運動を眞實に示すものにあらず而して高さの減縮の程度及び位相の差の大小は二個の原因に依りて多少あり

(一) は井戸及導管の構造より来る固有の原因にして即ち m の數値の大小に關係するものなり導管の徑を大にし其長さを小にし内面の滑となる管を使用し井戸の徑を小にする時に振幅減縮の程度は小にして位相の後れも亦小なり之に反する時は振幅減縮の程度及び位相の後れ共に大なり
 (二) は外海々面の振動の如何に原因するものにして即ち(59)式中の α の内に含まる、量の大小に關す、一般に週期の小なるもの程井戸内に於ける振幅減縮の程度及び位相の後れ大となる(59)式中 T が小なれば $\alpha = \frac{1}{2\pi} \sqrt{\frac{m}{T}}$ 間の α は小となるを以て α も亦小となるべからず之に反し T が大となれば α も亦大となる、從て潮汐の如き週期の大なる(即ち六時間餘波)の場合には α の量は大となるを以て m が可なり小なる時 α 雖も m は殆むど 1 に等しくなる、換言すれば普通の自記検潮機を以てせば潮汐は實際上殆むど振幅の減縮なく又位相の後れもなく観測することを得ることとなる

以上述ぶる所に依れば検潮機としては m は可なり小とするも差支へなきのみならず風波其他の雜種の波を成る可く井戸内に侵入せしめざるを望む場合には m を小とするを必要とす、即ち導管の徑を小にするか其長さを大にするか其内の抵抗を大にするか若くは井戸の徑を導管の徑に比し大とするを要す、之に反しセーシュ以下週期の小なる海面の振動を観測せんとするには普通の検潮機にては其目的を達すること能はざるを以て特種の量水機を必要とするこするこを知るに足る

運動の最初の條件に關係する場合

例へば自記検潮機の導管内に扉ありて任意に之を開閉することを得べき場合又はある有限の大さを有する水面が扉に依りて外海と連絡せる場合に於てある與へられたる瞬間に扉を開放し外海と連絡を通す時其以後に於ける井戸内若くは水面内の水面の運動如何此問題は上來述べたるもの、一の特別なる場合に過ぎざるを以て勿論上述の解決法を應用し得ざるべからず

前に述べたる水面の運動をバラボラと假定せる場合の方程式は此問題に對しても完全なる解決を與ふるものにあらず

第二圖に於て井戸内の水面を豫め A と同水平に保ち置き外海の水面が A 即ち最高水位に達したる時始めて扉を開き連絡を通す時は如何と云ふに(15)に於て $A_z = 0$ なるを以て結局次の如し

$$\sqrt{z-u} = -a'(\theta-t) \quad (61)$$

此場合には $\sqrt{\theta}$ なるを以て $-a'(\theta-t)$ は正號となる而して

$$\sqrt{z-u} - \beta'(\theta-t) = 0$$

を探るべからざるは $\beta'(\theta-t)$ は負號となり根本の觀念に背反するを以てなり

(61)
より

$$z-u = a'^2(\theta-t)^2 \quad (62)$$

之れに依れば内外水位の落差は時の進むに従ひ漸次大となる其關係はバラボラなることを見る C 點に至りては $t=2\theta, u=0$ 故に

$$z = a'^2\theta^2$$

而して $0 < a'^2 < a$ なることは容易に證明することを得、從て C 點に於ける z の高さは A B よりも小なり、然れども海面が尚 C より下る場合に z の變化を(19)により定めんとするに當りては前已に其曲線

の性質を論じたる條下の(七)項に據り不都合なる結果を生すべし。

第二圖に於て井戸内の水面を豫め A' と同水平に保ち置き海面が A' 即ち最低水位に達したる時始めて連絡を通ずる時も前と同様の結論に達す

井手内の水面を豫め平均水面の高さになし置き海面が平均水面に達したる時連絡を通ずる場合には前に述べたる方程式(12)又は(19)によりては全く解決すべからず、之れは曲線の性質(四)及び(五)によりて然るなり

此の如く本問題も亦理論的に之を解釋するの途なし、依りて前述の便宜法を適用すれば次の如し

$$t=0; \quad V_0 = g m \sqrt{u_0 - z_0}$$

$$t=n; V_i = 2mV \sqrt{y_n - z_n}$$

$$\frac{V_0 + V_1}{2} = m(\sqrt{u_0 - z_0} + \sqrt{u_1 - z_1}) = z_1 - z_0$$

今 $m\sqrt{u_0 - z_0} = c_0$ を置く、此れは最初の條件による數なるを以て已知數なり。

$$m\sqrt{u_1-z_1}=z_1-(z_0+c_0)$$

次に
これは z_1 に就て 二次式なるを以て 之れより z_1 を求むることを得

$$\frac{V_1 + V_2}{2} = m(\sqrt{u_1 - z_1} + \sqrt{u_2 - z_2}) = z_2 - z_1$$

論說及報告

月九年三正大

$$m\sqrt{u_2 - z_2} = z_2 - (2z_1 - z_0 - c_0) \quad (64)$$

$$\begin{aligned} & z_2^2 - z_2[2(2z_1 - z_0 - c_0) - m^2] + (2z_1 - z_0 - c_0)^2 - m^2 u_2 = 0 \\ & + [2(z_{n-1} - z_{n-2} + \dots + (-1)^n z_n) + (-1)^{n-1}(z_0 + c_0)]^2 - m^2 u_n = 0 \end{aligned} \quad (65)$$

今

$$2(z_{n-1} - z_{n-2} + \dots + (-1)^n z_n) + (-1)^{n-1}(z_0 + c_0) = p$$

と置けば (65) は次の如くな。

$$\begin{aligned} & z_n^2 - z_n(2p - m^2) + p^2 - m^2 u_n = 0 \\ & \therefore z_n = \frac{2p - m^2}{2} \pm \frac{1}{2} m \sqrt{4u_n + m^2 - 4p} \end{aligned} \quad (66)$$

此式により z_1, z_2 等を順次に計算するこを得し
例へば前に挙げたる實例の場合に井戸内の水面を豫め平均水面に保ち置き海面が第11圖に於ける
0に達したる時始めて連絡を通じたるものと假定する時は其以後の z の數値は如何に云ふに此場
合には

$$u_0 = z_0 = 0 \text{ なるが故に } c_0 = 0; \quad m = 0.067$$

又 $u_1 = 1.554$ (四) の單位を秒とする $p = 0$

$$\therefore z_1 = -\frac{0.067 \times 0.067}{2} + \frac{1}{2} \times 0.067 \times \sqrt{4 \times 1.554 + 0.067 \times 0.067} = 0.079$$

此場合にばくは上へへあきくは正號なるを要するを以て(67)中の平方根は正號を取る

次に $u_2 = 3.000$; $p = 2 \times 0.079 = 0.158$

$$\therefore z_2 = \frac{2 \times 0.158 - 0.067 \times 0.067}{2} + \frac{1}{2} \times 0.067 \times \sqrt{4 \times 3 + 0.067 \times 0.067 - 4 \times 0.158} = 0.269$$

次に $u_3 = 4.242$; $p = 2 \times (0.269 - 0.079) = 0.38$

$$\therefore z_3 = \frac{2 \times 0.38 - 0.067 \times 0.067}{2} + \frac{1}{2} \times 0.067 \times \sqrt{4 \times 4.242 + 0.067 \times 0.067 - 4 \times 0.38} = 0.509$$

追て此の如し

以上の如くにして得べきの曲線は明かならずと雖も(57)に示すものにあらざることは想察し得べ

し、此場合に於ては(57)中の a_0 及び T は一定せずして時と共に變化し時の進むに従ひ結局 a_0 及び T に等しくなるべくものなり、換言すれば以上の如き運動の繼續する時は漸次に第二圖に示せる狀態に接近することとなるべし

以上に述べたる所と類似の場合に種々あり、例へば井戸内に急にある一定の水量を注入せる場合、反對に井戸内より一定の水量を急に除斥せる場合又井戸内に他より常にある水量の注入しつゝある場合等之れにして此等は上述の方法により順次に z を求むることを得るなり

今井戸及び導管の代りにある水面及び水路を想像する時は海面とある水路により連絡せる湖又は瀉の場合となる然れども此場合には水路及湖瀉内に於ける波の波及を考へざるべからざるが故に以上の如く簡単には取扱ふこと能はざるに至る

結論

以上に述べたる所の要點を概括すれば次の如し

自記檢潮機の井戸内に於ける水面の運動

四七一

- (一) 自記檢潮機に於て普通使用する所の如き導管によりて外海と連絡せる井戸内の水面は外海々面の運動に伴なひ一の強迫運動をなす、此運動の如何なるものなるやは理論上之を求むるは困難なり
 (二) ある大家は已に外海々面の振動をバラボラと假定し理論上の解決を試みたるも其結果は實際に不都合
 めに未だ完全ならず

(三) 井戸内の水面は外海々面と同様なる方程式にて示し得べき振動をなすものと假定せば兩者振幅の關係及び位相の差を計算することを得べし

(四) 其結果に依れば實現し得べき範圍内に在る井戸及び導管系に於ては井戸内水面の振幅は海面の夫れよりも必らず小となり且つ位相の後れを生ず

(五) 其振幅減少及び位相の後れの程度は二種の原因によりて異なる、(1)は井戸及び導管に固有なるものにして導管内に於ける水の流れに對する抵抗大なれば大なる程又井戸の横断面積が導管の夫れに比し大なれば大なる程振幅減少の度及び位相の後れ大となる(2)は海面の振動に關係するものにして其週期が小なれば小なる程井戸内水面の振幅減少の度及び位相の後れ大となる、從て潮汐の運動は週期甚だ大なるを以て井戸内に於ては殆むご振幅の縮少を生せず又位相の後れも之れ無し
 (六) 井戸内水面の運動を起す最初にある條件ある場合に於ても其以後の運動を理論上に決定するの方法なしと雖もある假定の下に其運動を計算することを得るの途あり (完)

拔萃